

「実り」と「成長」①御霊の実(愛、喜び、平安)

ガラテヤ 5:16-23

急に寒くなってきました。つい先日まで秋だというのに夏に戻ったかのように暑かった日がうそのように思えます。改めて春夏秋冬、四季の変化のある中で過ごしていることを覚えます。

今年、私たちは詩篇のみことばから「実り」と「成長」というテーマで教会生活を送ってまいりました。聖書はクリスチャンの信仰生活がなつめやしのように多くの実を実らせると共に、実らせるためにはレバノンの杉の木のように絶えず成長することを求めています。今年もあとわずかになり、実りの秋を迎えていますので今週から数回、ガラテヤ人への手紙から「実を結ぶ」ことについて一緒に学びたいと思っています。

1. 完全な実

「ガラテヤ人への手紙」と聞いて、多くのクリスチャンが、思いうかべるのは、「御霊の実」だろうと思います。「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」があげられています。どれも、私たちに必要なもの、私たちが欲しいと思うものばかりですね。御霊の実は九つありますが、「実」ということばは単数ですから、この九つは、ばらばらにではなく、ぶどうのひとふさのように、ひとかたまりのものとして与えられていることがわかります。「愛」はあるけれど「喜び」はない、「喜び」はあるけれど「平安」はないということはありません。

この九つの実は三つずつに分けることが出来ます。最初の「愛、喜び、平安」は神との関係における実、次の「寛容、親切、善意」は他の人との関係における実、そして、最後の「誠実、柔和、自制」は自分自身に関する実です。さきほど実が単数形と言いましたように九つの実はそれぞれにかかわりあっていて、どれ一つが欠けても完全ではありません。ヤコブの手紙 1:17 に「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。」とあるように、完全な神が私たちに与えてくださるものはすべて、良いもの、完全なものであり、神が与えてくださる御霊の実も当然、私たちに必要なものがすべて含まれ、調和のとれた完全なものなのです。そして私たちの責任は、この九つというよりも九重の御霊の実を、そのままの姿で、さらに大きく実らせていくことです。「愛、喜び、平安」はあるけれど、人に対する「寛容、親切、善意」がないとか、人に対しては「寛容、親切、善意」を持っているが、自分に関しては「誠実、柔和、自制」がないというのは健全な信仰生活とは言えません。御霊の実がいびつであり、変形しているとしたら、それはもはや「御霊の実」とは呼べなくなってしまいます。ですから、御霊の実を豊かに実らせるためには、まず、それを変形させようとするものや実らせまいとするものに注意する必要があります。

2. 実りを妨げるもの

では御霊の実が結ばれるのを妨げるもの、また、それを変形させようとするものとは、いったい何でしょうか。実はガラテヤ人への手紙は、御霊の実を妨げるもの、それを歪んだものにしようとするものと戦うために書かれた手紙です。ですから、この手紙の中にその答えがあります。それは、「誤った教え」と「律法主義」と「肉」です。

御霊の実を実らせまいとする第一のものは「誤った教え」です。ガラテヤ 1:6 で「私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」とあるように、それは「ほかの福音」と呼ばれています。もちろん、「ほかの福音」と言っても、福音が何種類もあるわけではありません。「神がイエス・キリストの十字架によって私たちを救ってくださる」という救いのメッセージはただひとつです。それで、次の節には「ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。」ガラテヤ 1:7 と書かれています。正しい教えを

学び、信じることなしには御霊の実は結ばれることはありません。それは正しい教え、福音に基づいているなら必ず御霊の実を結んでいることになるということです。私はどんな御霊の実を結んでいるのでしょうか？

御霊の実をいびつなものにする第二のものは「律法主義」です。「律法」は神がお与えになったもので、イスラエルに神の民としてのあるべき姿を教えるためのものでした。ところが、イスラエルの人々は、神の律法からさまざまな「細則」を作り出し、神のことばを「規則の体系」にしてしまったのです。細かい規則が何百とつくり出されました。規則を作り出した人々は、神が律法を通して示そうとしておられるみこころを求めるのでなく、ひたすらに規則を守ることを追求しました。そして、律法を落ち度なく守れば救いが得られると考えたのです。ガラテヤ人への手紙は「人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる。…律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」ガラテヤ2:16と断言し、結論として「もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味なものとなる。」ガラテヤ2:21と教えています。

ガラテヤの教会は、最初は正しい教えに立っていたのですが、「律法を守らなければ救われない」と教える人々によって惑わされ、福音から離れて行きました。「まったくの罪人がキリストの身代わりの死によって罪から救われる」という福音よりも、「律法を守れば救われる」という教えは人間のプライドをくすぐります。「私はこれこれのことをしたから救われたのだ」という満足を与えます。そして私たちは何にせよ、一生懸命真面目に努力する人が好きです。しかし、信仰においてそれは誘惑であり、実際は、私たちのどんな行いも、自分を救うためには不十分なのです。救いはただ神の恵みによるのであり、それを受け取る信仰によるのです。「律法主義」は、神の恵みを無駄にし、私たちから健全な信仰を奪いとります。御霊の実は人間の努力で身につけることのできるものではありません。それは、神からの「恵み」であって、「信仰」によってだけ受け取ることができるものなのです。

御霊の実に反する第三のものは「肉」です。ガラテヤ5:17に「肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らう」とありますように、御霊と、肉とは常に相反するものです。聖書で「肉」といわれているのは、神に逆らう人間の罪深い性質のことです。聖書は、人間に罪があると教えていますが、聖書が「罪」と言う場合、それはけっして、不道德な行ないや悪事、また、強盗や殺人などの犯罪のことだけではありません。人の目には見えなくても、悪事をしたう欲望、自分さえ良ければと思う利己心、自分だけが正しいと思う傲慢など、人の心の奥深くにあるものをさします。ガラテヤ5:19-21に「肉の行ないは明白であって、つぎのようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。」とありますが、普段は表面には表われないで、「行ない」の背後にひそんでいて、機会があれば顔を出してくるもの、それが「肉」なのです。

3. 神からの実

では、「御霊によって歩む」「信仰によって歩む」とは具体的にどうすることなのでしょうか。御霊の実の最初の三つ、「愛、喜び、平安」をとりあげて考えてみましょう。

まず、「愛」ですが、これは、何よりも神が私たちを愛してくださった愛を表わします。愛にはいろいろな種類の愛があり、実際、聖書が書かれたギリシャ語でも、男女の愛、兄弟の愛、肉親の愛などはそれぞれに違ったことばで表されています。しかし、御霊の実の「愛」には、そうしたことばのどれでもなく、「アガペー」ということばが使われています。「アガペー」の愛とは、神の愛のことです。人間の愛には、条件が入ってくるのですが、「アガペー」は無条件の愛です。また、人間の愛は「わたしはあなたを愛してあげたから、あなたもわたしを愛すべきだ。」と、「おかえし」を求めますが、「アガペー」は報いを求めない、献身的な愛です。神は、ご自分の御子を私たちのために十字架の上で死なせてくださいました。

聖書は、十字架を指差して「ここに愛がある。」と言っていますが、「アガペー」は犠牲の愛でもあるのです。この無条件の愛、献身の愛、犠牲の愛は、キリストによって示され、聖霊によって、すでに信じる者の心に与えられています。ローマ人への手紙5:5に「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」とあります。まじめなクリスチャンほど「私には愛が足りない。」「もっと神を愛さなければならない。」と感じ、感じるだけでなく、罪悪感によって自分を責め続けます。しかしそれは神のみこころではありません。そのことを嘆く前に、あるいは自分を責める前にまず、神がどんなに私たちを愛してくださっているかを知り、信じ、確信することの方が大切です。「私たちが神を愛したら、神も私たちを愛される。」という考えは、「律法主義」に逆戻りすることになります。私たちは神から愛されていることを知れば知るほど、より神を愛することができるようになります。神に愛されることなしに神を愛することはできないのです。愛とは、「神が聖霊によって私たちに与えてくださるもの」ということが分かる時、私たちから神への愛も実るようになるのです。

「喜び」も、同じように、「神が聖霊によって私たちに与えてくださる喜び」と定義することができます。この喜びは、環境や状況によって左右されるもの、時間がたてば消えてしまう一時的なものではありません。それは、私たちの生涯を通してだんだんと大きくなっていく救いの喜びです。私は神の愛をいただいています。神はその愛によって私たちを罪から、その刑罰から救い出してくださいました。私たちは、敬虔な意味で神を「恐れる」ことはあっても、神を「怖がる」必要はありません。むしろ、神を喜ぶのです。ローマ5:11に「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」とあります。「神を喜ぶ。」「神を大いに喜ぶ。」というのは、クリスチャンでも、なかなかそれが分からないと言う人がいます。私たちは、神に喜ばれるものでありたいと願い、また、神を喜ばせる生活をしようと努力します。それはとても素晴らしいことであり、しなければならないことです。しかし、歯を食いしばってするようなことはありません。もし、神を喜ぶことなしに、神を喜ばせようとしたら、それこそ、それは、喜びどころか、苦痛となってしまいます。神を喜ぶ人だけが、神を喜ばせることができます。私たちが神を喜びとしていくなれば、それによって「喜び」の実を实らせることができるのです。

第三の「平安」もまた「神が聖霊によって与えてくださる平安」と言うことができます。現代は、とても不安な時代です。なぜなら至るところで不安を煽るようなことがあり、平安のうちに生きてゆくことは難しいのではないかと思います。しかし、神を信じる者は、そのような中でも、不思議な平安を体験しています。平安というものは、決して私たちの側で作出すことはできません。神が与えてくださるものです。ペリピ4:6-7に「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」とあるように、神からの平安はいつも私たちの思いを超えたものです。それは、私たち自身から出たものではなく、神から出たもの、聖霊によって与えられるものです。

愛、喜び、平安は、神が、イエス・キリストを信じる者に、聖霊によって与えてくださるもので、決して宗教的な行いによっても、生まれつきの能力によっても得られないものです。信じる者にもれなく与えられるものです。信仰によってそれを受け取りましょう。そして、与えられている御霊の実を感謝し、喜びましょう。そのことによって、御霊の実は、私たちのうちにいよいよ豊かなものとなっていくのです。